

地域情報（県別）

【山梨】「在宅をやるために医者になった」女性医師が30代で開業するまで-高添明日香・あすか
在宅クリニック院長に聞く ◆Vol.1

2020年2月14日 (金)配信 m3.com地域版

在宅医療のニーズが高まる中、在宅医になるため医療の道に進んだ若手医師が山梨県にいる。高添明日香院長は幼少時の祖父との触れ合いや高校生時のボランティア経験から在宅医を目指して医学部を受験。在宅医療に力を入れる佐久総合病院や山梨市立牧丘病院で経験を積み、37歳という若さで2018年に「あすか在宅クリニック」（甲斐市）を開いた。高添院長のこれまでを聞いた。（2019年12月12日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

——まずは、あすか在宅クリニックの概要をお聞かせください。

当院は在宅医療に注力しているクリニックで、火曜日と木曜日の午前に予約制の外来を行っているほかは、患者さん宅や施設を訪問しています。現在の訪問患者数は約110人で、1カ月間における訪問回数は約180回です。在宅医療は法律で訪問範囲が半径16km以内と決まっていますが、当院では患者さんの急変時などに駆けつけやすいよう、半径8km以内の方々を中心に対応しています。

ただ、乳がんや子宮がんなどを抱えている女性の患者さんで男性医師が嫌だという方、状態が複雑で外来メインの開業医だと対応が難しいケース、過去に勤務していたクリニックの患者さんで周辺の医療環境により引き継げなかった方に関しては、遠方でも訪問しています。本来であればより近くにいる医師が診た方が望ましく、そんな患者さんほど近くで在宅医が支えられるように、地域を育てていかなければいけないので本望ではないのですが、現状は困っている患者さんやご家族の声を考慮してお応えしています。



高添院長

——先生は過去、山梨市立牧丘病院の古屋聡先生と一緒に働いていました。古屋先生も取材させていただいたことがあるのですが、同院は在宅医療に力を入れているのが特徴でした。勤務医時代から在宅医療に関心があったのでしょうか。

はい。詳しく言うと、「勤務医時代から」ではなく、「在宅医になりたいから」私は医師になりました。

きっかけは幼少時にさかのぼります。私は当院のある甲斐市の西に接する韮崎市の生まれで、私をかわいがってくれた祖父は同市の中でも田舎の山間部に住んでいました。当時は周辺に医療機関がなく、祖父は「近くに病院があればなあ…」とよく話していました。2、3歳のころから祖父のぼやきを何度も聞かされていた私は、小学生に上がるころには医師になることを考えていたように思います。

在宅医を志望するようになったのは高校2年生のころです。所属していたボランティアサークルの活動で、山奥にある特別養護老人ホームで入所者の食事介助を経験しました。当時はまだ介護保険制度のなかった時代ですから、建物は古く、少ない職員で何とか対応している状況。高齢者が施設に入ること自体が珍しい時代だったので、入所者の多くは重度の認知症で会話もままならない状態でした。暗い雰囲気や気圧されたことはさることながら、私が衝撃を受

けたのは彼ら彼女らが発していた言葉でした。「家に帰りたい」「家に帰りたい」。せん妄状態に陥りながらも、そう泣いたり叫んだりしていたのです。私は思いました。「人生の最期がこれでいいのか…。患者さんが長く暮らしてきた生活の中で最期を過ごせるようにできないか。医療がそこに力を貸せないか」と。

——そんな経緯があったのですね。これからは高添先生のように「在宅医になりたいから医師になる」人が増えるかもしれません。在宅医としてはどう経験を重ねていったのでしょうか。

駿台甲府高校（甲府市）を卒業した後、一浪して日本大学医学部に進みました。本当は山梨大学医学部の地域枠を狙ったのですがうまくいかず、その末の進路でした。10数年前の当時、総合診療科は限られた大学にしかなく、日大でも在宅医療を学べる環境はありませんでした。そこで私は大学卒業後、研修医マッチングを通して佐久総合病院（長野県）で研修を受けることにしました。

同院に決めたのは、患者さんとの距離が近かったためです。大学6年生のポリクリ（臨床実習）の最後の2カ月間はエレクトティブという選択実習期間で、私は同院に入り浸っていたわけですが、そのときに「ここだ」と思う出来事がありました。

80代のパーキンソン病の男性患者さんがインフルエンザにかかり、近所の人に連れられて来院しました。一般的に都会の病院だとインフルエンザでは入院させないと思うのですが、佐久総合病院は患者さんが高熱により自力でご飯を食べられず、また、リウマチで体の不自由な奥さんと2人暮らしであることから、「短期的に入院してもらおう」と判断。さらに、状態が落ち着いた後は主治医と看護師が患者さんのご自宅を訪問し、患者さん夫婦が今後の日常を過ごすのに足りないものがないかをチェック・調整した上で退院を促していたのです。

驚きました。医療者の中には「たかがインフルエンザで」と思う人もいるかもしれませんが、患者さんの生活背景も考えた上で親身な対応をする病院の姿勢に好感を持ち、結果的に初期・後期研修の5年間に佐久総合病院で過ごしました。同院は当時、本院以外に100床ほどの分院と3つのクリニックを持っていたので、外来、入院治療、在宅医療と幅広く学ぶことができました。

——佐久総合病院での研修を終えた後に山梨市立牧丘病院に移ったのでしょうか。

はい。山梨市立牧丘病院で古屋先生たちと5年間働き、クリニックでの院長職を経て37歳だった2018年5月に開業しました。40歳を過ぎてから開業しようと考えていた時期もあったのですが、もともと在宅医になることを決めた時点で将来的に開業しようと思っていたので、開業すること自体は自然な流れでした。自分の理想とする医療を行うには、人の下にいるのではなく、自由度の高い状況で、自分の責任で医療を行う必要があると考えたのです。

◆高添 明日香（たかそえ・あすか）氏

2007年、日本大学医学部卒。佐久総合病院（長野県）で研修を受けた後、故郷の山梨県に戻り、山梨市立牧丘病院に勤務。その後、クリニックの院長職を経て2018年に開業。「あすか在宅クリニック」（同県甲斐市）の院長として在宅医療に注力する。日本内科学会総合内科専門医、日本在宅医学会専門医・指導医、日本プライマリケア連合学会認定医。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

